

さいたま 川柳



「巻頭言」

我見といひごと

願法みつる

池では餌を与えると、水鳥や鯉や亀が必ず寄って来る。そんな中、年寄り臭い姿の亀達には、特別に情を掛けている。全く鈍重なのだ。潜水艦のように下から突き上げる鯉にしばしば横取りされる。その亀達が、最近、近寄って来ない。ヒトの気も知らないで。

そんな時、「我見」という言葉に出会って目が覚めた。自分以外の自然の営みには、それぞれの生き方があり、人間であれば心がある。心の基準は様々である。だから、亀には亀なりの事情があるということだ。

私を含めて、多くの人は我見とか我執とか、個人の片寄った思い込みで、他人を見、そして批判し易い。そして家族・仲間・上司部下・先輩後輩・師弟、経歴などを介する人間関係の場で、我見に染まるニンゲンを多く目にするようになる。川柳界も又同じである。彼らは等しく自分は善であり円満な人格者であり、他が歪んでいると考えるだろう。しかし善悪、正邪とは、心の裏表であり、紙一重だ。よくある人間の業の姿だと思う。自分自身を知れとはまさに至言である。

我見や我執を捨てて、性善も性悪も等しく取り込んでしまえば、自分が見えて来るといふ万古の哲学だ。他人批判よりは自己内省という事か。なあ亀さん。

十月号 目次

わたしの好きな句 茂木道子	表紙	2
巻頭言 我見といひごと	願法みつる	1
彩玉集―同人吟		2
古丘の世界	文・今村 寿子	5
雑詠	願法みつる選	6
映像川柳	石田 正則	6
七七句	編集部選	14
ふるさと紀行「ふるさとつれづれ」	石原 弘子	17
エッセイ「旧安田邸とつつじ」	竹内田三子	18
埼玉川柳会の第一人者 清水美江		20
私の秋	久保田寛容	21
交替鑑賞（九月号より）	國嶋 武	23
初歩添削講座「聴く」「雑詠」	加藤孤太郎	25
題詠 「拭 う」 辻 直子 選		29
「人情」 千葉 古丘 選		31
「ねちねち」 岡田 時雄 選		35
さいたま九月句会		36
オール女性選「美しい花達」句会報告		38
九月句会スナップ		38
大会等ご案内		3
編集さろん		3
句会案内		4
表紙（題字・清水 美江 写真・千葉 古丘）		4

平成26年
10月号 (No.659)

日川協加盟